**松岡洋右外交**

**－日独伊三国同盟を中心に－**

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　**3年　岡村麻里奈**

**1.はじめに**

「松岡洋右」の名を聞いて思い浮かべることは何であろうか。おそらく、国際連盟脱退や日独伊三国同盟、日ソ中立条約の調印を行ったことから日本を第二次世界大戦に導いた戦争責任者の一人である、というマイナスの側面が真っ先に浮かぶであろう。また、未だ記憶に新しい平成18年（2006年）の『日本経済新聞』でスクープされた富田朝彦元宮内庁長官のメモもこのイメージに拍車をかけた。その内容は天皇陛下のお言葉として「私は或る時に、A級が合祀されその上、松岡、白鳥までもが （中略）だから私はあれ以来参拝していない、それが私の心だ（後略）」というものである。この富田メモ以外にも『昭和天皇独白録』において「松岡はヒットラーに買収されたのでないか」という内容のことが書かれていて、松岡が昭和天皇に嫌われていたのは事実である。また、一般誌レベルでは松岡の外交戦略を「低次元の戦術的計算」であり「第二次近衛内閣の外交を引っかき回した勝手な独走」といった論調で語ることが多いように感じる。

さらに悪いことに、東京裁判において松岡は日米交渉破綻の原因となった人物として重要視されていたにも関わらず、肺結核悪化のため昭和21年（1946年）5月6日の罪状否認を最後に出廷不能となり、同年6月27日に死去した。このため外交政策に関する松岡の真意を本人の証言から計ることは不可能となった。よって近衛が死の直前に書き上げた『近衛手記』の自己弁護的な素因から近衛は松岡の向こう見ずな外交手段の犠牲者のように考えられ、松岡の責任が非常に重大視されたのである。

確かに日独伊三国同盟が結果として日米対立を決定的にし、後に太平洋戦争へと至ったことは事実である。しかし、実際このように三国同盟が松岡の個人の勝手な独断によって交渉・妥結されたとは考えにくい。よって、この論文では、日独伊三国同盟と対米交渉、当時の日本国世論を検討することで松岡の外交像を見直し彼の真意に近づくことを目的とする。

**2.日独伊三国同盟と四国協商**

**2-1.背景**

初めに昭和15年（1940年）9月27日にベルリンで調印された三国同盟の主な内容は以下の通りである。（1）日本は独伊の欧州における新秩序建設の指導権を認め、（2）独伊は日本の大東亜における新秩序建設の指導権を認める。（3）三国は新秩序建設につき相互に協力し、その一国が欧州戦争または日中戦争に現に参加してない国から攻撃された場合には、三国はあらゆる政治的・経済的・軍事的手段を用いて相互に援助する。（4）この条約は三国とソ連との間に現存する政治的状態に何等の影響を及ぼさぬ、というものである。

同盟が調印された1940年は激動の年である。前年9月のポーランド侵攻によって欧州戦争を勃発させたドイツはこの年の6月までにポーランド、デンマーク、ノルウェー、オランダ、フランスを次々と下し、ドイツに抵抗するのはイギリスのみといった状態であった。この事態に日本はドイツの早期勝利を確信し、ドイツ主導の戦後国際秩序の中で、敗戦国となるオランダ、イギリス、フランスの東南アジア植民地を得るために南進政策を積極化し始める。自給的な経済ブロックを確立し、アジアにおける日本の支配的な地位を獲得しようとしたのである。ドイツ側も極東に進出する力を持たないため、6月20日には日本に仏印・蘭印の保障占領を求める意向を伝えている。

このような状況下で、外務省欧亜局は5月31日、「欧州の新情勢に即応する南方策」を立案し、南洋地域との政治的・経済的・軍事的関係の強化や対独伊提携を提言するに至った（1）。また当時の外相有田八郎は6月29日ラジオ放送を行った。放送の中で有田は「万邦をして各々其の所を得しむる（2）」ことを目指すと宣言し、「日本と東亜の諸国と南洋諸地方とは地理的にも、歴史的にも、民族的にもはたまた経済的にも極めて密接なる関係にあり（2）」と南進の方針をも示唆した。このように、南進政策、そして「大東亜共栄圏」への歩みは7月の松岡が外相に就任する前から始まっていたことが分かる。この欧州戦争に便乗した南進政策は米英の権益を侵害し衝突を招くものであったが、有田外相は南進には米国の承認が不可欠だと考えていた。

**2-2.三国同盟のねらいと四国協商**

昭和15年(1940年)7月22日、第二次近衛内閣が組織され、松岡が外相に就任する。9月までにはドイツの勝利で戦争が終結するとの見通しがあったため、戦後国際秩序の中で東南アジアに進出する地位を獲得するために、三国同盟を迅速に成立させる必要があった。また南進に際して北方の安全確保のために対ソ不戦の体制を確立させ泥沼にはまっていた日中戦争の終結も図る必要があった。松岡が外相としてなすべきことはほぼ決められていて、就任早々非常に大きな課題を突き付けられたといえる。

さて、こういった背景で「対米瀬戸際外交」と呼ばれる松岡外交が展開された。松岡は日独伊三国同盟、さらにこの三国同盟にソ連を加えて日独伊ソ四国協商を作り上げることで米との勢力均衡、対米交渉力の強化を企てる。前外相有田の「米国からの南進の承認を得る」という方針を受け継ぎ、そのために米国と同じパワーバランスで交渉に望み大東亜共栄圏を認めさせようというのが松岡の狙いであった。

**2-3.松岡のアメリカ観**

では、このような松岡の強気な外交戦術はどのようにして生れたのだろうか。福留繁の『帝国海軍の反省』の松岡論によると松岡はアメリカを知りすぎていてかえって失敗を招いたと論じられている。8年ほどのアメリカ留学生活を通して得た処世術として「アメリカ人というのは勇敢な相手に敬意を払う。初めからお辞儀をしてくるような弱虫は軽蔑する。まず強い一撃をくらわせてから話し合いに移るような相手に敬意を表するのだ。だから、こちらも強気強腰で押してゆかねば、アメリカと対等に渡り合うことは難しいのだ。アメリカ人に対する行動の仕方としては、たとえ威嚇されたからといって、自分の立場が正しい場合に道を譲ったりしてはならない。そのためにもし殴られたら、すぐその場で殴り返さなければいけない。一度屈服すれば二度と頭をあげることができないからだ。対等の待遇を欲する者は、対等な行動でのぞまなければならない」（野間：1974年）と松岡自身が語っている。

また、昭和16年（1941年）12月に徳富蘇峰に当てた書簡に

想ひ起こしますが、前の世界戦争中であった。ウィルソン大統領が例の頑固と尊大とで、我に対して誠に不合理にして横車的な態度を取った時、時の外務次官であった幣原君に種々柔らかに米人との交渉の骨を悟したが、御存知の通りコレも頭の固ひ上に自惚の強い人で、米国に一度も行ったこともない癖に米国と米人を知ったつもりで容易に私の忠告に耳を傾けなかった。そこで私は遂に一日面を犯し声を励まして、「私も日米親善を欲する事に於いて決して貴君に譲らない。之を欲すればこそ、率直に強硬に彼に当たるべく、それでなければ彼は到底了解し得ないのだ。（外交辞令は率直―蛮的―なる米人には所詮理解出来ぬ）（後略）（3）

というものがある。この書簡で松岡はパリ講和会議において、実際にアメリカ人を知らない幣原喜重郎の外交姿勢を批判したことを回想している。この時松岡はまだ報道係主任という下端の立場であったため、日本全権団の交渉が上手くいかないのを見て歯がゆい思いをしたのであろう。また日米開戦に至った理由として、ここでもアメリカ人をよく理解出来なかった日本政府の失敗を指摘し、米国をよく知っている自分の外交が第二次近衛内閣に理解されず、失脚したことへの無念さを訴えている。

このように松岡が結んだ日独伊三国同盟は、彼のアメリカ観からすれば、上記にある通り米英の反ファシズム戦線と対等な状態で話すための手段であった。しかし、「あまりに強気になりすぎて、ついにアメリカの本腰をいれた反撃をくらうことになった」と福留繁は書いている。（蛇足だが松岡が卒業したのは田舎のオレゴン大学である。松岡はオレゴン大学卒業後、お金を貯めて東部の名門私立大学へ入学しようと目論んでいたが、母の病気のため帰国しその望みが叶うことはなかった。もし、彼が将来のアメリカ政府を動かす人材を多く輩出する東部の名門校で学んでいたら歴史は変っていたかもしれない。）

さて、三国同盟、日ソ中立条約に調印した松岡であったが、ドイツの早期勝利は実現せず、米国は態度を硬化させ、その後の経済封鎖、日米交渉の決裂を招くこととなる。また昭和16年（1941年）6月の独ソ戦開戦により四国協商は完全に挫折、日本は太平洋戦争へとなだれ込んだのであった。

**3.松岡による対米交渉**

**3-1.世論へのはたらきかけ**

ここでの対米交渉とは、松岡が米国世論を操作し米国の対日政策を動かそうとした企てのことである。上記で述べたように松岡はアメリカに対して強気な態度だけをとった訳ではない。三国同盟調印直後に米国に届いた松岡および外務省や近衛首相の発言は、いずれも米国に「大東亜共栄圏」の承認を迫るもので、確かに協調的とは言えないが、対米戦争を示唆することは周到に避けられていたのである。松岡は昭和15年（1940年）10月5日に駐日大使グルーとの会談の席上で三国同盟に関する声明文を手交した。声明は、「三国同盟は特定国を目標とするものではないこと、大東亜共栄圏は平和的手段で建設されること、米国が日本の「真意」を理解しさえすれば、日米関係には何の変化もないこと（4）」などを主張したもので、さらに、「日本は東アジアから外国権益を追放する意思はなく、むしろその開発への協力を歓迎する（4）」とも付け加えている。さらに新聞王ロイ・ハワードとの個人的なつながりを利用し米国世論を動かそうと企てる。ハワードは傘下の新聞に松岡新外相の紹介記事を「松岡は「持てる国」アメリカに反感を抱き、9カ国条約を否定しようとしているが、一方で「現実主義者」であり冷淡な利害計算によって米英との強調に日本を導くはずだ（5）」と期待を込めて執筆している。

松岡は抑制された発言を繰り返し終始交渉を呼びかけた。三国同盟による対米圧力で力を誇示する一方で、協調の呼びかけを使い分けて対米交渉を行おうとしたのだ。

**3-2.三国同盟条約三条（自動参戦条項）の解釈**

米国に対する日本の楽観は昭和15年10月に入り、在日本米国人の引き上げを国務省がグルー大使に勧告するよう支持を与えたことをうけて急転する。そして以後松岡は三国同盟の「平和的性格」を強調する声明を頻発するようになる。12月9日の外国人特派員との記者会見で（1）日本の参戦義務は締約国が一方的に攻撃された場合にのみ発動されるものであり、従ってドイツが米国を攻撃した場合は発動されない。（2）参戦条項は自動的に発動されるのではなく、締約国間の「協議」によって決定される（6）と第三条をかなり限定的に解釈した説明をしたのである。以上の発言の趣旨は米国でも大きく報道された。しかしながら、その後米国で武器貸与法が成立したことや米国の欧州戦争参戦への準備の一環として出された「日米諒解案」によって松岡の態度は硬化しこの対米交渉も失敗に終わることとなる。

**4.日本の世論**

　では日独伊三国同盟を締結する前後の日本国内の世論はどのようなものだったであろうか。中村菊男の『昭和陸軍秘史』によると「（前略）政党、政界、政府を問わず、民間も含めて、当時はほとんどみんなが大英帝国は凋落し、代わって独・伊が欧州大陸を制覇するという判断に立っていたと言える」とある。国内の新聞はヒトラーが政権を獲得した当初はドイツに批判的であり、ヒトラーのユダヤ人や自由主義者、マルクス主義者への文化弾圧政策にも異議を唱えユダヤ人に同情するような論調であった。しかし、第一次世界大戦後の国際秩序、ヴェルサイユ体制及びワシントン体制に不満を抱えているという点で日本とドイツは共通点を持つようになる。親独の論調は独ソ不可侵条約をうけて一度は静まるものの、ドイツが欧州戦線で戦果をあげると再び親独路線は復活した。新聞各紙はドイツの各地での勝利と大きく報じ、その科学技術力を褒め称えた。このような親独論調に対し英仏人の読者から抗議書が寄せられたことを受けた1940年6月15日の『東京日日新聞』の社説に次のようなものがある。「日本政府は不介入主義であっても中立ではない。（中略）我等は、そして日本国民は思想感情において英仏において英仏に対して中立であり得ないのだ（7）」松岡が外相に就任以前、すでにある新聞によって日本は枢軸国側であるという表明がはっきりなされていたのだ。松岡はアメリカ留学時代にウィリアム・ジェニングス・ブライアンという政治家の演説を見て、大衆を代表し真に大衆にアピールする政治家になりたいという志をもった。また、ジュネーブの総会に参加し国際連盟を脱退して帰国した際、松岡は横浜港で国民の空前的な歓迎を受けた。その後は欧米と渡り合うことが出来る「英雄」として国民から人気を得たのである。日本国内の機運がすでにドイツ寄りであったこと、また松岡が大衆政治家を目指していたことから彼が日独伊三国同盟を結ぶ以外の方法を取ることは難しかったのではないだろうか。

**5.おわりに**

以上で述べてきた通り、大東亜共栄圏の構想が松岡外相就任以前からあったこと、そして日本国内の世論から日独伊三国同盟は松岡にとって結ばなければならなかったものであるように感じる。また、日米開戦に至らないように対米世論に繰り返し働きかけ、日独伊三国同盟についての釈明も行っていた。アメリカ留学や各地を外交官として歴任、またロマノフ王朝の滅亡を早くから言い当てた（８）経験などから情勢を見抜く自らの直観力を信じてもいたのだろう。しかし、三宅正樹が「松岡のそのような「主観的意図」（アメリカの参戦阻止を最終目標にした四国協商）は国際情勢の「客観的現実」とははなはだしく異なるものであった（9）」と指摘している通り、四国協商をもってアメリカと対等に渡り合うというのは客観的に見れば幻想に過ぎなかったのである。当初の松岡の真意が日米開戦を目的としたものではなかったとはいえ、実現可能かどうか客観的現実に基づいて判断できなかったという点で彼の外相としての責任はやはり免れないものであったといえる。

註

(1)外務省記録A.1.0.0.7「帝国南方方策関係一件」（外務省外交資料館）

(2)外務省編『日本外交年表竝主要文書（下）』（原書房、1965）

(3)高野信篤「新発見!「日米決戦」開戦直後、松岡洋右から徳富蘇峰への書簡。松岡洋右―

その外交の明暗と大東亜戦争」*『環』*28、42－62（2007）

(4)”Grew Diary”（Record of the U.S. Department of State relating to the International

Affairs of Japan, October 5 1940）

(5)『ニューヨーク　ワールド・テレグラム』紙（1940.9.26）

(6)外交問題研究会編『松岡外相演説集』（日本国際協会、1941）

(7)社説『東京日日新聞』（1940年6月19日）

(8)野間省一『松岡洋右―その人と生涯』（1974年、78頁）

(9)三宅正樹『日独伊三国同盟の研究』（南窓社、1975）

参考・引用文献一覧

・野間省一『松岡洋右・その人と生涯』（講談社、1974）

・豊田穣『松岡洋右・悲劇の外交官』（新潮社、1979）

・三輪公忠・戸部良一『日本の岐路と松岡外交』（南窓社、1993）

・岩村正史『戦前日本人の対ドイツ意識』（慶應義塾大学出版会、2005）

・服部聡「松岡外交像の再構成」『創文』493（2006）

・森茂樹「太平洋戦争前夜の対米外交と世論工作―松岡洋右とロイ・W・ハワード」

『日本史研究会』559（2009)